

# 首都高速道路の景観に関する言説の

## 視点の変遷と論点に関する研究

1X15D084-2 山田 周尋\*

Norihito YAMADA

本研究では、首都高速道路の景観に関してどういった視点からの景観が言及されてきたのか、それらがどう変化してきたか、またどういった論点について論じられてきたか明らかにすることを目的とする。そのために、首都高速道路の景観に触れている新聞記事について、対象となる場所・視点に注目してその変化の整理し、首都高速道路の景観に関して論じている新聞記事・雑誌記事・書籍についてどういった論点であるかに着目して言説の整理を行った。その結果、高速道路上や俯瞰した視点などから、高速道路外の街路などから見た景観へと言及の中心が移ってきたことや、時間的広がりや構造物の美醜、水辺空間が論点となっていることがわかった。

*Keywords* : 首都高速道路、言説、日本橋、新聞記事

### 1. 研究の背景と目的

1962年12月20日に京橋—芝浦間が開通した<sup>1)</sup>首都高速道路は2018年時点で開通から56年が経過し、現在では東京を中心に総延長約320キロの規模に達し、一都三県に路線網を有している<sup>2)</sup>。こういった路線網は都心部では日本橋上空や千鳥ヶ淵を通過している他、横浜ベイブリッジやレインボーブリッジなど様々な場所で都市景観の一部を構成している。

過去においてはアンドレイ・タルコフスキー監督の映画「惑星ソラリス」において未来都市の姿として首都高速道路が描かれた一方、現在では日本橋を跨ぐ竹橋ジャンクション—江戸橋ジャンクション間の首都高速道路について一部区間の地下への移設が検討される<sup>3)</sup>など首都高速道路の景観に対する評価は変化している。

では、このような首都高速道路に対する見方は時間の経過とともにどのように変化してきたのだろうか。また、都市空間内部に位置するという特徴から首都高速道路は高速道路上だけでなく近接した街路や周辺のビルなどもその景観に対する視点場として考えらえる。そういった視点場のなかで注目されるものがどのように変化してきたのか把握することは、今後都市景観の一部としての首都高速について捉えるうえで重要であると考ええる。

そういった景観について把握するうえでテキストデータや画像など対象物が明確に切り取られており、その際にどういった視点から行われているかが明確な媒体が有用を用いることであると考えられる。なかでも、新聞記事は対象が幅広いという特徴を持ち、世論を広く伝えるというメディアとしての性格から

話題性を持った様々な都市空間が比較的公平かつ一般的に記述されていると考えられる<sup>4)</sup>。また、雑誌や書籍については新聞記事と比較して各記事の分量が多く、また主張を伝えるという性格からある問題に関する論点が明確であると考えられる。

以上より、本研究では新聞・雑誌・書籍のテキストデータを対象に、首都高速道路の景観について言及する際にどのような視点から見た景観について言及されているかの変遷と、どのような論点から論じられているかを明らかにすることを目的とする。

### 2. 研究の位置付けと方法

#### 2.1 既存研究と本研究の位置づけ

##### ①首都高速道路の景観を扱った研究

首都高速道路の景観について、言説に注目した研究は以下の二つが挙げられる。

・篠原ら(1984)「首都高速道路の景観評価」<sup>5)</sup>

首都高速道路の評価について景観的側面に注目し、評価者、対象となる要素、評価内容、評価の時間的変遷を明らかにすることを目的とした研究である。調査手法としては、1960年から1981年の間の新聞、一般誌、土木・都市・建築系の雑誌を対象として首都高の景観に言及した言説を抽出し、記述内容によって分類し、年表に整理する方法を取っている。その結果として、評価対象とされている景観が道路線形、首都高速道路上からの眺望、江戸時代からの名所の三種類に限られ、それぞれに関する比重が変化しているのみであることや、首都高速道路を含めた景観について街路上からの視点で評価したものがほとんどな

いこと、首都高速道路の景観について直接はほとんど議論されてない事が明らかになった。

・神村ら(1999)「首都高速道路のイメージ変遷に関する研究」<sup>6)</sup>

首都高速道路について景観に関する設計思想の変遷と首都高速道路の景観に対する市民イメージの変遷の両者を明らかにすることを目的とした研究である。市民イメージについては観光ガイドブックを主な言説の抽出対象とし、それに加えて篠原らの研究で抽出された新聞での言説や小説・随想での言説を対象としてそれらのうち各時期においてイメージを最も顕著に表すものを取り出している。また、この際に首都高速道路によってもたらされる環境の変容に対する批判よりも視覚像を積極的に評価している言説により注目している。その結果明らかになった市民イメージの変化が図 2.1 である。当初は形態美や未来的といった評価など、ポジティブに捉えられていたものが、1970年代以降公害問題の顕在化とともに公害の発生源などネガティブなイメージが強くなっている。その後も公害の発生源としてのイメージが続いている一方、ランドマークとなる構造物の出現による名所化や無機的な景観などの観点から評価するものも発生している。

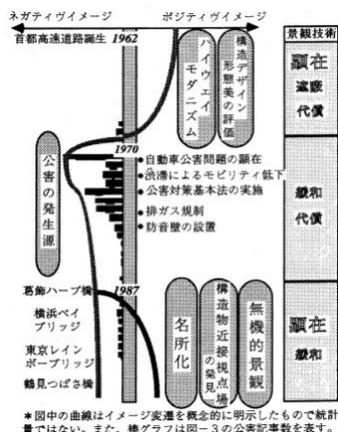


図 2.1 首都高の景観に対する言説の変化<sup>6)</sup>

②新聞や雑誌の言説を対象とした研究

・高木ら(1999)「新聞記事における都市空間の記述過程」<sup>4)</sup>

人々が都市空間に対して抱く印象のうちメディアに起因するものについて、その生成過程を明らかにするため言説内で描かれる都市空間の記述過程を明確にすることを目的としている。対象として地方紙を用い、そこで記述について対象物や年ごとの記事数、季節ごとの分類、記述用語などの分類によって記述過程を明らかにしたほか、対象となる空間の類型ごとに異なる特徴があることを明らかにした。

・田中ら(2013)「建築専門誌における東日本大震災関連の特集内容」<sup>7)</sup>

東日本大震災以後 1 年以内に掲載された建築専門誌における

震災関連の言説を題材とし、そこで言及される復興のための方策を検討することで震災後の社会情勢下で顕在化した建築家の社会的役割に関する議論を明らかにする。

## 2.2 研究の位置づけ

既存研究により、1996 年以前について首都高速道路の景観評価の変遷を扱った研究はある。本研究では、既存研究では行われていない 1982 年以降の新聞・雑誌・書籍の言説を用いて首都高速道路の景観評価の変遷を明らかにする。

## 2.3 研究の方法

本研究では、首都高速道路の景観に言及した新聞・雑誌の記事や書籍を対象とする。新聞記事については対象誌に掲載された景観に関する言説について網羅的に扱い、その掲載年や対象となった場所・視点について整理し、首都高の景観に関する観点的変化を分析する。雑誌の記事・書籍と景観に関して何らかの主張が見られる新聞記事についてはその内容に注目し。論点を整理し、論点的変化と傾向の分析を行う。そのうえで、その二点についてそれぞれを考察を行い、最後に本研究のまとめを行う。

## 3. 新聞記事についての調査

### 3.1 新聞記事についての調査の概要

初めに、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、日本経済新聞を対象として、首都高速道路の景観に関する言説の調査を行った。

調査方法は各社のデータベースに収蔵されている新聞の1982年から2017年までの記事本文・見出しを対象として、キーワード「首都高」を含む記事を抽出した。そのうえで、事故・事件に関する記事や首都高速道路公団の人事に関する記事、2005年9月に行われた首都高速道路公団の民営化を巡る記事など見出しから明らかに景観と関係していないものを除いて内容を確認した。そして首都高速道路の景観について本文中や見出しにおいて言及しているものを選び出した。以下の表3.1で各社のデータベース名と「首都高」をキーワードとして検索した結果該当した記事数とそのうち景観について言及したものの件数を示す。

表3.1 新聞記事の検索結果と景観について言及した記事件数

社名	サービス名	検索での該当件数	景観に言及した記事
朝日新聞社	聞蔵II ビジュアル <sup>8)</sup>	4360	62
読売新聞社	ヨミダス歴史館 <sup>9)</sup>	4135	92
毎日新聞社	毎索 <sup>10)</sup>	2770	37
日本経済新聞社	日経テレコン 21 <sup>11)</sup>	1223	15

3.2 新聞における言説の分類

新聞の言説について、記事数の変遷を図3.1に示す。

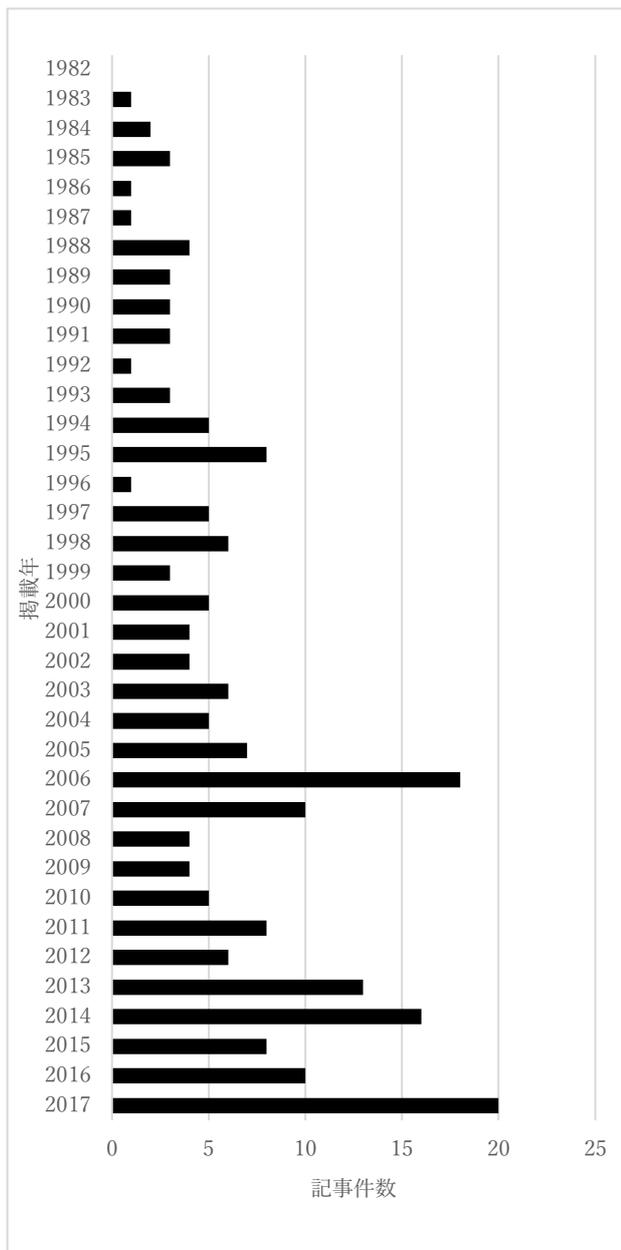


図3.1 新聞言説の変遷(n=206)

このグラフから、おおむね年に5件程度の記事数で推移していた記事数が2006年前後、2010年以降大きく増加していることがわかる。これについては後述するが、日本橋上空の首都高をめぐって大きな動きがあった時期に重なっている。

また、抽出された言説について、言及されている場所ごとに集計したものを表3.3に示す。集計するにあたって、基本的に言及されている地点に当てはまる首都高速道路の路線ごとに集計を行い、橋梁名やジャンクション、地名など特定の地点が明言されている場合はそれに従って集計を行った。一つの記事内で複数の地点について言及されている際は重複してカウントした。

表3.3 景観について言及された件数

地点	件数	割合 (%)
日本橋	98	46.7
6号線、レインボーブリッジ	各9	4.3
5号線、湾岸線	各7	3.3
ベイブリッジ、鶴見つばさ橋、都心環状線	各6	2.9
3号線	5	2.4
かつしかハープ橋、大橋ジャンクション、中央環状線、日本橋川	各3	1.4
7号線、江戸橋ジャンクション、成田山深川不動堂、六本木交差点	各2	1.0
1号線、2号線、9号線、横羽線、加平ランプ、五色桜大橋、埼玉新都心線、台場線、三吉橋、三郷ジャンクション、小松川ランプ、大平ジャンクション、中央環状新宿線、東京湾トンネル通風塔、渋谷駅前、上野駅前	各1	0.5
全域・特定不能	21	10.0
総計	210	

この表より、首都高速道路の景観についての言及された記事のうち36.6%の記事が日本橋について言及していることが分かる。また、こうした言及すべてが首都高速道路の高架橋を外側から見たときの景観についての言及である。

また、新聞に掲載された言説について日本橋について言及されたものと、それ以外の地点について言及された記事数を比較したのが下の図3.2である。このグラフと図3.1から、首都高の景観に関して言及した記事が多い年と日本橋についての言及が多くなっている年はおおむね一致することがわかる。また、日本橋に関して言及した記事数が大きく増加している2006年、2014年、2016年にはそれぞれ「日本橋川に空を取り戻す会」が日本橋上空の首都高撤去を小泉首相に提言、2014年に首都高が更新事業認可、2017年に石井国交相と小池都知事が「日本橋周辺の首都高速の地下化に向けて取り組む」旨発表を行っている。その一方で、日本橋が重要文化財に指定された1999年には日本橋上空の首都高について言及した記事はない。

次に、記事内でどの視点から見た景観を描いているかについての記事数の変遷を示したグラフを図3.3に示す。

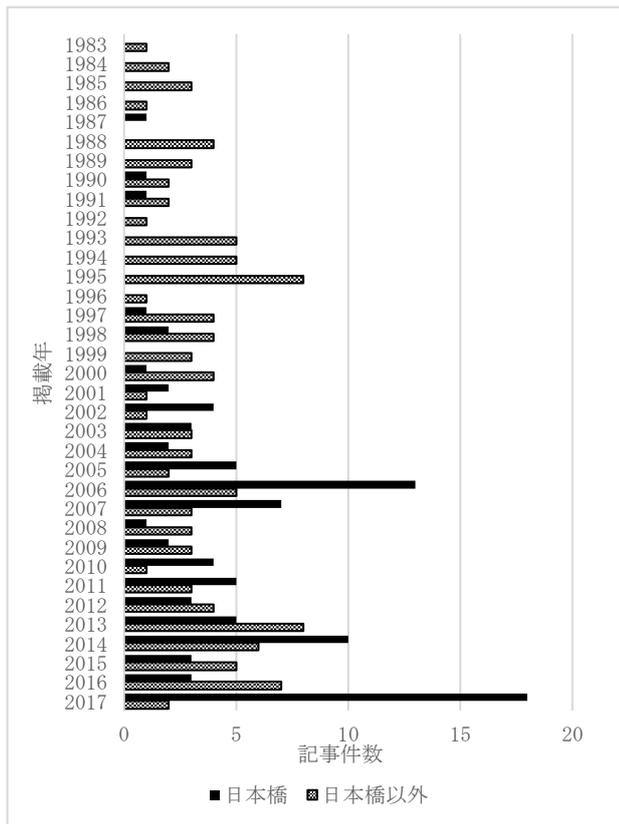


図3.2 地点ごとの言説数の変遷 (n=210)

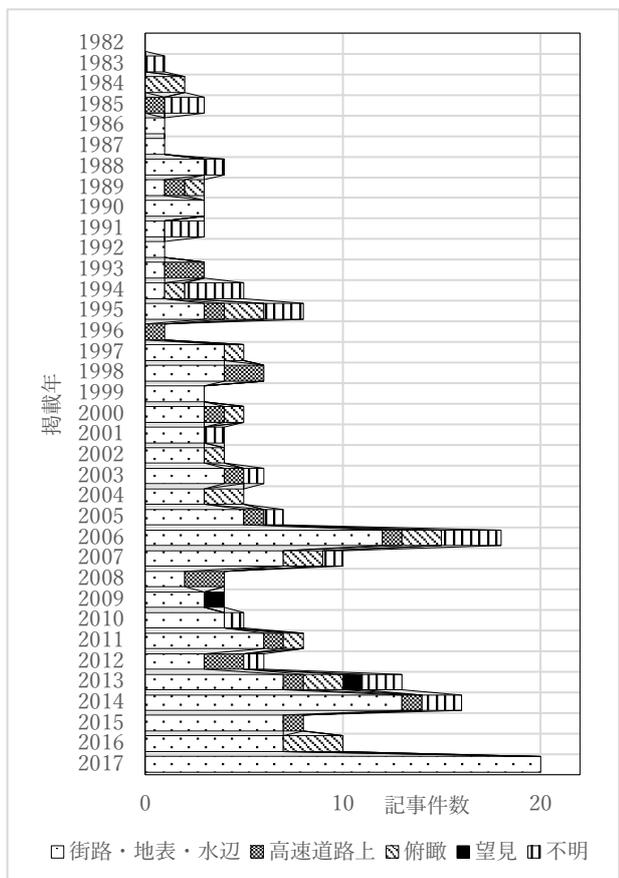


図3.3 視点ごとの言説数の変遷 (n=206)

このグラフより、街路・地表・水辺など首都高の外側の地表面からの景観に関する言説が対象期間内において増加していることが読み取れる。特に、1997年以降他の言説は現れない年がある一方でこの視点からの言説は毎年表れており、この20年間の首都高の景観に関してはこの視点からのものが主体であるといえる。

### 3. 4 考察

分析対象とした記事について、対象地、視点、内容それぞれについて分析したことで以下のことがわかった。

- ・首都高の景観に関して言及した記事数は2003年以降特に増加しているが、中でも日本橋上空の首都高に関して言及したものが多く、首都高速道路について何らかの動きが起こった時期と、記事数の増加は連動している。
- ・首都高の景観に関して、地表・街路・水辺など高速道路外かの地表から見た景観の言説が増加しており、1997年以降はその形での言及が主体となっている。

## 4. 言説の内容に関する調査

### 4. 1 言説の内容に関する調査の概要

言説の内容に関する調査では、主に雑誌や書籍を中心に、首都高速道路の景観に関して論じた記事についてその論点の整理を行う。

まず雑誌についての調査を行った。調査方法は国立国会図書館サーチ<sup>12)</sup>を使用し、1982年以降に発行され、書誌情報が登録されているすべての雑誌記事の見出しを対象に検索ワードを「首都高」として行った。そのうえで、事故・事件に関する記事や首都高速道路公団の人事に関する記事、2005年9月に行われた首都高速道路公団の民営化を巡る記事など見出しから明らかに景観と関係していないものなどを、新聞を対象とした調査と同様にして除外した上で、国会図書館・早稲田大学図書館・土木学会附属土木図書館で利用可能なものについて調査を行った。以下の表4.1で「首都高」で検索した際に該当した記事数と調査の結果、景観への言及を確認できた記事の数を示す。また、表4.2で雑誌の種類ごとの記事件数を示す。

表4.1 雑誌の検索結果と景観について言及した記事件数

「首都高」該当記事数	そのうち景観に言及したもの
1029	44

表4.2 雑誌種別ごとの記事件数

一般誌	専門誌	土木系専門誌
11	4	29

まず、土木系専門誌について景観に言及した29本の記事を収集できた。そのうち28本は現状どうなっているかではなく新設

構造物について設計上景観へ配慮した点を言及した記事や既存構造物の美化などに関する記事だった。残る1本については日本橋上空の首都高に関して2005年に行われた「日本橋まちづくりコンペ」の受賞作に関する記事だった。

また、一般誌・専門誌に関しては15本のうち9本の記事が日本橋上空の首都高に関するものだった。これらの記事は、日本橋上空の首都高移設の提言などに関連したものであった。このうち7本は否定的にとらえているものである。

4.2 収集した言説の分類

これまでに収集した新聞記事・雑誌記事に加え書籍を対象に景観に関して何らかの主張が見られる記事27本を対象として、景観のなかで首都高速道路が果たしている役割についてどう評価しているかを整理した。対象とした記事数の媒体ごとの内訳を表4.3に示す。

表4.3対象とした言説の媒体ごとの内訳

雑誌記事	新聞記事	書籍
10	11	4

対象とした言説について、首都高速道路が景観のなかで果たしている役割についてどのような論点から首都高速道路を肯定的に捉えているか・否定的に捉えているかを整理したものを表4.4に示す。

また、対象とした言説について、掲載年・論点・肯定的か否

定的かで記事数を分類したものを以下の図4.1に示す。

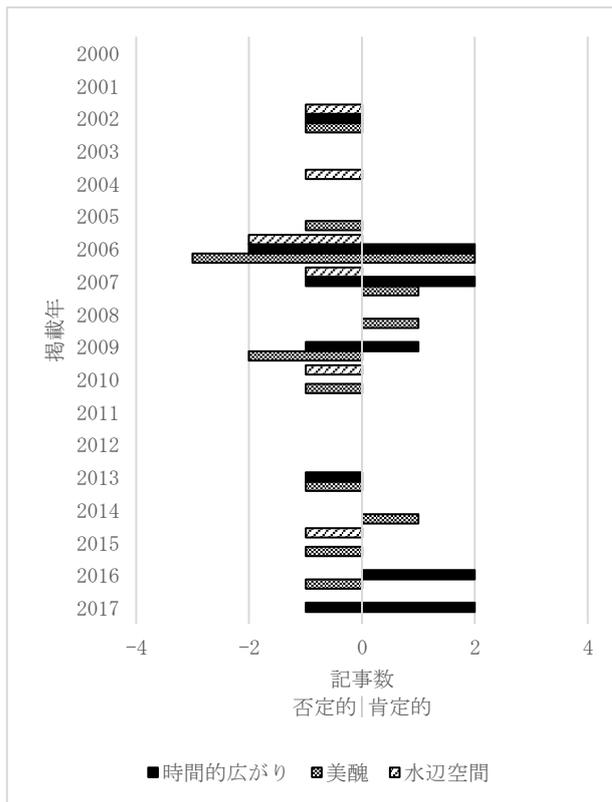


図4.1論調の変化

これらの図・表から、論点ごとの傾向として、景観が良い・悪いといった美醜の面では否定的なものが多い一方、時間的広

表4.4 論点の整理

記事数	首都高速道路道路に肯定的		論点	首都高速道路に否定的		記事数
	該当部分	要旨		要旨	該当部分	
9	<p>浮世の風車な橋を首都高速がまたぐ東京・日本橋。小泉前首相の一声で、半界や野界トップを巻込み「高速をどける」の合図が起ったのは記憶に新しい。</p> <p>だが、オリジナルの日本橋は江戸期の木造橋。今の橋は明治に西洋の橋をまねたもの。高速も用組買収で手回らない川の上に架設した高層建築期のウルトラCといえなくもない。野村胡堂本匠など周囲の昭和前期のモダン意匠も含め、どれも時代の超人だ。【2007.01.19朝日新聞】</p>	首都高速道路も歴史的な景観の一部である	時間的広がり	歴史的な景観を首都高速道路が破壊している／首都高速道路の建設で歴史的な景観が破壊された	お江戸日本橋、と頃まで歌われた日本橋は一九六四年に日本橋川の上に架けられ、当時の五街道の玉座とされた。今の橋は明治四四年以来の由緒ある石造の二重アーチ橋だが、この四〇年間はその真上を首都高速道路が走っているため本匠も悪かず半廻り「目障り扱い」を受けてきた。【Verdad, 2009.07「平成号現年」①日本橋一たとえ30年かかっても景観を阻害する全ての首都高をやり直し！】	7
6	<p>景観の問題は、首都高が本当に醜いのかということだ。ほとんど無条件の前提として、首都高は悪い景観のシンボルとされている。日本橋のプロジェクトを税金の無駄使いとして批判する人も、奥の奥まで強いてどうかと述べているくらいだ。しかし、筆者には、首都高さえとせば、景観が自動的に良くなるとは思えない。もちろん、明治期の老舗茶・蕎麦屋がデザインした日本橋は重要な近代遺産だが、ヨーロッパに行けば、もっと狂った橋がたくさんある。その縮小コピーのような日本橋よりも、暴力的なスケールで挿入された首都高の方にダイナミックな都市の風景を写し取る人もいるだろう。【エコノミスト, 2007.01「景観 日本橋の首都高移設計画は新たな「物モノ事案」だ！】</p>	曲線美／迫力のある光景	美醜	醜い／圧迫している	高速にふたをされ、街が押しつぶされそうなお六本本廻りや、埋め立てられて見えない堀田川にも腰を立てた。【2016.08.08毎日新聞】	11
0			水辺	水辺空間が首都高速道路によって覆われ、遠いものになった	一九六四年を期して出現した事務所に新橋と高速道路があるが、前者は都市河川上の空間を押し、今日おこぶる評判がよくない。一九六〇年代は、日本のみならず、現在の景観的なファッション性を重視する都市文化の土壌が敷かれた時代だった。【東京人, 2004.08「増資一代々水橋沢一期。オリンピックの正當なる遺産は残されたか?」】	7

がりという面では首都高速道路を肯定的に捉えているものも多  
いこと、水辺空間に関しては一貫して否定的な論調が多いこと  
がわかる。また、どの論点においても否定的な言説が先行し、  
それを追う形で肯定的に論ずるものが現れていることがわかる。

さらに、論点ごとの内容を比較した場合、首都高速道路につ  
いて否定的な論説においては首都高速道路があることが醜い、  
圧迫しているといった美醜の面から批判するものが多い一方で、  
肯定的な言説においては首都高速道路自体も時間的広がりを持  
った、歴史的な景観の一部であると捉えていることが多いこと  
が分かった。

#### 4. 3 考察

否定的な論説においてみられる「圧迫感がある」という論点  
は新聞に掲載された言説において街路上など高速道路外からの  
視点が主体となってきたことと関係していると考えられる。

また、時間的広がりという論点においては、首都高速道路自  
体が建設後60年近く経過しているものでそれ自体に歴史的価値  
がある存在である、ということの評価しているか、それ以前か  
らあった伝統的な景観を破壊したものと捉えているかによ  
って肯定的・否定的なものがわかれていると考えられる。

### 5. 結論

首都高速道路の景観について触れた新聞記事について分析す  
ることで以下のことがわかった。

新聞に掲載された言説について「首都高」をキーワードとし  
て収集を行い、その対象地、視点、内容それぞれについて整理  
を行ったことにより、

- ・首都高の景観に関しての言及のされ方が先行研究<sup>5)</sup>において  
示されていた、高速道路上や俯瞰した視点からの景観、公害  
の発生源、無機的な景観や近接した視点からの構造美といっ  
た傾向から変化していた。特に、先行研究の期間においては  
見られなかった街路上など高速道路外からの視点からの景観  
に関するものが増えている。

ということがわかった。

また、新聞記事・雑誌記事・書籍について論点や論調を整理  
することで、

- ・水辺空間に関しては首都高速道路ほどの論説においても否  
定的に捉えられている
- ・時間的な広がりをもつ景観、構造物の美醜という論点では  
首都高速道路について肯定的・否定的双方の見方が存在し、  
否定的なものが先行している。また、肯定的な言説において  
は時間的な広がり注目したものが主体であり、否定的な言説  
では美醜という点に注目したものが多い

- ・時間的広がりについて、否定的な論説においてはそれ以前か  
ら存在する伝統的景観が首都高速道路の建設によって破壊さ  
れた、という形で首都高速道路が新しいものであると捉えて  
いるのに対し、肯定的なものでは首都高速道路が建設され始  
めてから60年近く経過しているものであり、歴史的価値を持  
つものとしてみなしているという違いが見られる

ということがわかった。

またこれらについて、景観について言及する視点の変化は先  
行研究である篠原らの研究<sup>5)</sup>で「生活者としての視点がない」  
と結論付けられていたものが、生活者の視点である街路上な  
どからのものが増加したことは路線網の拡大による視点場の増加  
も考えられるが、対象となった景観の大半が日本橋であること  
を考えると、主体の側に変化があったためだと考えられる。

また、篠原らの研究<sup>5)</sup>や神村らの研究<sup>6)</sup>では時間的広がりを持  
った景観について、首都高速道路は一貫して新しいものとして捉  
えられていたのが、首都高速道路も歴史的価値をもつ古いもの  
であるという見方が新しいものとしての見方と並立している。  
これは、対象地として日本橋が挙げられていることから、江戸  
時代からの名所である日本橋という対比される対象があるため  
であると考えられる。

#### <参考文献>

- 1) 首都高速道路公団「首都高速道路公団30年史」1989年
- 2) 首都高速道路株式会社「首都高速道路の現状」  
(<https://www.shutoko.co.jp/company/enterprise/road/plan/presentcondition/>) 2018年11月21日閲覧
- 3) 国土交通省「報道発表資料：第1回 首都高日本橋地下化検  
討会の開催」  
([http://www.mlit.go.jp/report/press/road01\\_hh\\_000897.htm](http://www.mlit.go.jp/report/press/road01_hh_000897.htm))  
1) 2018年11月28日閲覧
- 4) 高木 清江, 松本 直司, 齋藤 達哉, 瀬尾 文彰, 「新聞記事  
における都市空間の記述過程」, 都市計画論文集34 巻, p.  
397-402, 1999年
- 5) 篠原 修, 天野 光一, 阪井 清志, 「首都高速道路の景観評  
価」, 日本土木史研究発表会論文集, 第4巻, pp. 81-pp. 89, 1984  
年
- 6) 神村 崇宏, 岡田 昌彰, 仲間 浩一, 「首都高速道路のイメ  
ージ変遷に関する研究」, 環境システム研究, 第24 巻, pp.  
186-pp. 193, 1996年
- 7) 田中 浩介, 塩崎 太伸, 大嶽 陽徳, 四ヶ所高志, 奥山 信  
一「建築専門誌における東日本大震災関連の特集内容」, 日  
本建築学会大会学術講演梗概集, 2013巻, pp. 131-pp. 132, 2013  
年
- 8) 聞蔵II ビジュアル  
(<https://database.asahi.com/index.shtml>)
- 9) ヨミダス歴史館  
(<https://database.yomiuri.co.jp/about/rekishikan/>)
- 10) 毎索(<https://mainichi.jp/contents/edu/maisaku/>)
- 11) 日経テレコン21(<http://telecom.nikkei.co.jp/>)
- 12) 国会図書館サーチ <http://iss.ndl.go.jp/>